



## ●色彩心理シリーズ 赤について

赤は色彩心理の中で「活力・情熱・自信」を与える色とされています。身につけると気持ちが前向きになり、自然と行動力も高まるのが特徴です。

一方で、赤は交感神経を刺激し、血流や心拍を高めるため、イライラや攻撃性につながることもあります。これは脳が「赤＝危険・止まれ」と本能的に認識する思い込みの影響だと考えられます。

そのため、赤を取り入れるときは分量の調整が大切です。全身を赤でまとめるより、スカーフやアクセサリといったワンポイントにすると、元気を得ながらも過剰な興奮を抑えられます。また、白やベージュなど落ち着いた色を組み合わせれば調和が生まれ、黒と組み合わせれば、ドラマチックな印象を演出できます。

赤は、人に特別な印象を与え、着る人の心をポジティブにするようなマジック的な色なのでしょう。「画像は、シャネルの赤」。

(幹事：田森恭子)



## ●日本の伝統的な色名・梔子色

梔子（くちなし）は、支子とも表記し、山地、または庭木として栽培される、あかね科の常緑の低木で、夏に枝の頭部に香りの強い白い花をつける。果実は楕円形で六個の永存性のがく片があり、黄赤色に熟しても口を開かないので「口無し」。「言わぬ色」ともいう。

乾燥した梔子の実で染めた色は黄支子といい、鮮やかな黄色である。梔子と紅花を交染して深支子と言ひ、この色は黄丹とも言われ、皇太子の袍の色として現代まで続いている当時の禁色である。

交染とは二色以上の染料を使って、望みの色を染め出すことを指す表現である。

化学染料が発明され実用化される前の草木染めによる染色は、赤は紅花か茜染め、青は藍染めが主、黄色の染めに梔子、刈安、黄檗、鬱金などが使われていた。

緑色を染める原色は無く、藍染めに梔子を染め重ねて緑色を染め出す交染という方法が取られていた。紫色は紫草の根による染めが使われた。これで、赤・橙・黄・緑・青・藍・紫と、虹の七色の濃淡の色を染め出す手段が揃うことになる。

顔料の場合は、黄と朱を混色して橙、黄と青で緑、青と朱で紫となる。

(永田泰弘)

## ●大辞典ひろい読み 92 一こ

**五色の酒**：ごしきのさけ。カクテルの一。色彩・比重の異なる5種類のリキュールを一つのコップに入れ、色とりどりの層ができるようにしたもの。フランスで始まり、日本では明治末年から昭和にかけて銀座で流行。

**五色の賤**：ごしきのせん。律令制で、五種類の賤民。陵戸、官戸、家人、公奴婢、私奴婢。このうち家人、私奴婢は私有民。

**五色の水**：青・黄・赤・白・黒の五種の色をした水。灌仏会に仏の頭上に注ぎかけるもの。

**五識**：仏語。目・耳・鼻・舌・身の五根によって生じる色、声、香、味、触の五つの知覚作用。

**腰黒**：腰の部分に網代を張らず、黒く塗った駕籠。

**腰白**：腰の辺りを白く染め残した腰変わりの小袖。

**五糸節**：ごしせつ。この日に、五色の糸で作った長命縷をひじにかけるところから、五月五日の節句の異称。

**越の白嶺**：こしのしらね。白山の古称。

**御朱印**：朱印。また、朱印を押した公文書の敬称。

**御朱印船**：ごしゅいんせん。

**御朱印地**：ごしゅいんち。

\*大辞泉：小学館発行国語辞典（永田泰弘）